

<特集>

これまでのオリンピックとの関わり合い

吉田 孝久¹⁾

2021年夏、1年遅れで開催された東京オリンピックが終わりました。東京大会はコロナ禍で、これまでのどのオリンピックとも違う大会でした。選手にとってはやれるかどうか分からない不安の中で行われた大会だったので諦めずによく頑張ったのではないかと思います。

さて、オリンピックは4年に1度行われるスポーツの祭典です。多くの選手がこの大会を目標に頑張ってきていると思いますが、私も同じでこの大会に出たいと思ってトレーニングに励んできました。選手を引退してからもオリンピックが私にとっての最高のスポーツイベントであるということは変わらず、こうした大会に関わりたいという思いはありました。幸いにも私はこれまで4回現地にいてその空気を味わうことができました。選手として参加したシドニー大会、スポーツメーカーの社員で行ったアテネ大会、陸上競技連盟の強化委員として帯同したりオ・デ・ジャネイロ大会と東京大会です。

ここでは現地に行った大会について、それぞれの立場からみたオリンピックとそこで感じたことを紹介したいと思います。

I. 2000年（シドニー大会）

シドニー大会は私が選手として参加した唯一の大会でした。

私が選手として参加できる可能性があったのは1992年のバルセロナ大会からだと思います。それはこの大会の前年に行われた東京世界選手権にも出場していたからです。いつも通りのシーズンなら代表入りできたかもしれません。ただ、この年は大学を卒業する年で環境が変わってしまう年でもありました。生活や練習拠点は大学時代と変わらない環境だったのですが、通勤や会社での仕事など社会環境に慣れずにそのシーズンは不調でした。結局、選考会は優勝したものの参加標準記録を超えられず代表入りができませんでした。

した。

次のアトランタ大会（1996年）も代表入りの可能性は高かったように思います。参加標準記録も複数回突破し、春の参考競技会でも良かったのですが、今度は選考会で失敗して落選でした。シドニー大会はこうした経緯を経て、最後の最後に標準記録を突破して優勝して掴んだ代表切符でした。

総合大会であるオリンピックは多くの種目が行われます。メイン種目の競技日程はある程度決まっていますが、競泳や体操競技はオリンピック期間中の前半、陸上競技は後半に行われます。その中で、私の出場予定だった男子走高跳の予選は陸上競技の大会初日に行われました。この年は調子が良く、出場権を得てからはオリンピックで決勝に進みたい、できれば入賞したいという気持ちで大会に臨みました。

当日は予定通りウォーミングアップをし、万全の体調で試合に臨みました。体もよく動いていたので、今日はいけると思って招集所に向かったのを思い出します。そこでは、いつも通り、平常心で試合に臨むことと常に心掛けていたのですが、スタジアムに入った途端に10万人以上いるスタジアム一杯の観衆に圧倒され、我を失ってしまいました。いつも通り良い意味で適切にという意識から慌てず丁寧にしなければと思うようになり、試合前の跳躍練習では普段は4～5本で済ませているところ10本以上も跳んでしまいました。練習では適当に足を合わせて、あとは試合で跳びながら調整していくいつもの試合行動ができなかったのだと思います。練習跳躍の本数も自分では全く気が付かず、試合後にコーチに指摘されて気がついたくらいでした。試合ではいつも平常心を心がけていたのに気負い過ぎでした。結局、この試合では不完全燃焼のまま、そのシーズンで最も悪い記録で競技を終了してしまいました。

オリンピックには魔物が住むと言います。私は、代表切符を掴むために長い時間を要したことや多くの観衆を前にしたことや丁寧に行き過ぎてしまい、自分自身で魔物を作ってしまったようです。試合が終わったあとは茫然としていて何が起こったのか今でもよく覚えていません。大変苦い経験でしたが、これも指導者となった今はいい教訓になっているように思います。

¹⁾ 日本女子体育大学スポーツ科学科・学科長兼教授（専門：スポーツコーチング論）。1993年陸上競技・男子走高跳の日本記録（当時）樹立。2000年シドニーオリンピック同種目出場。2017年～2021年日本陸上競技連盟強化委員会オリンピック強化コーチ男子走高跳担当。

II. 2004年（アテネ大会）

アテネ大会にはスポーツメーカーの社員として現地に行きました。選手としては2001年に引退しましたが、引退しても所属のスポーツメーカーで勤務していたこともあって現地に行くことができました。おかげで選手や日本オリンピック委員会(JOC)の委員といったポジションからではなく、大会を支えるスポンサー企業の一員としてオリンピックを見ることができました。

私の現地での仕事はホスピタリティスペースの設営と運営でした。オリンピックは世界最高のスポーツイベントなので、大会期間中には日本のみならず世界から多くの関係者や企業が集まってきます。所属企業は、大会に野球と柔道の道具を提供していたので、スポンサー企業としてこの機会を利用して多くの人に認知してもらおうとともにここを訪れてくれた関係者にくつろいでもらうことを目的にホスピタリティスペースでの仕事をしていました。

このホスピタリティスペースはアテネ市内の商店街にあるカフェを借り切って行っていました。ちょうどパルテノン神殿から降りてきた道沿いにある絶好のロケーションでした。おかげで観光や市内にお土産を買いに来た関係者がそのついでに寄ってもらうことができました。

選手は試合前にはもちろん来ませんが、自分の試合が終わった後や試合の応援の合間など時間がある時に訪れてくれることもありました。会社がサポートしている選手も多かったこともあり、多くのメダリスト達も訪れてくれました。そして選手だけでなく、コーチや連盟の関係者、テレビなどのマスメディア、スポンサー企業や同じスポーツメーカーの役員まで、毎日多くの人がここを訪れては情報交換をしていました。

カフェということもあり、訪れてくれた人にはお茶や食事を提供し、お土産などを渡して帰ってもらいました。日本でこうした物品の準備していたときには、大量のTシャツやバックの数に、こんなにたくさん要るのかなと思っていましたが、帰るときにはその在庫もすっかりなくなっているほどでした。

こうした場所では関係者との商談も行われ、いくつかの契約も結ばれるきっかけにもなりました。オリンピックビジネスをここでの仕事を通じて肌で体験することができ、オリンピックが選手だけでなく多くの人や企業によって支えられているのを実感した大会でした。

III. 2016年（リオ・デ・ジャネイロ大会）

リオ・デ・ジャネイロ大会には日本陸上競技連盟の跳躍コーチとして帯同しました。この大会には、陸上競技の跳躍種目から7名の選手が参加しました。選手村や競技場に入れる Accreditation card (ADカード)の数は選手団で枚数が限られているので、ブロックの担当コーチがそれぞれの選手のサポートを行いまし

た。

ここでのコーチの主な仕事は、選手のスケジュール管理と練習や試合時のコーチングですが、それぞれの選手には専任コーチがついているので選手に直接コーチングをするというよりは専任コーチとのやり取りを通じてのコーチングがほとんどでした。これ以外に大切なのが試合の時に招集時間に遅れないように選手を招集所に連れて行くことでした。時間までに選手を招集所に連れて行くことは大切で、招集時間に遅れると試合に出られないことになります。実は、私が選手として参加したシドニー大会のときは種目の担当コーチがいませんでした。私の大会は陸上競技の初日だったので、W-up会場から招集所、競技場への導線がよくわからず、時間に遅れないように招集所に行くことは凄いプレッシャーでした。その時は、もしコール漏れにでもなったら日本に帰れないと本気で思っていたほどでした。ですから選手が試合に集中するために、当たり前ですがこうしたサポートはすごく大切だと思っています。

ところで、開催地のリオ・デ・ジャネイロは、大会に行く前から治安が非常に悪いという噂がありました。現地では選手村と競技場との往復の毎日でしたが、競技場のすぐ近くがスラム街だったので、常に多くの兵隊が機関銃をもって警備をしていたのであながち嘘ではないだろうと思っていました。せっかくブラジルまでいったのですが、市内に行ったのはマラソンの応援で行ってだけで、あとは本学の学生の応援で新体操の会場に行く程度でした。

スタッフとしてこの大会に帯同して一番印象が残っているのはリレーでのメダル獲得でした。練習の時からタイムもバトンパスの精度も高く、もしかしたらと期待していましたが、まさかアメリカに勝って銀メダルを獲得するとは思っていませんでした。こうした歴史的な瞬間にスタッフとして立ち会えたことは本当に幸せでした。

IV. 2021年（東京大会）

私はこの大会では男子走高跳の強化担当コーチとして選手のサポートを行いました。この種目には2名の選手が参加しましたが、コロナ禍に開催されたオリンピックはこれまでとは違う大会でした。特に無観客で行われたことと感染拡大防止の観点から後述するバブル方式を採用したことが大きな違いであったように思います。

無観客での試合は関係者しか大会会場に入れないという制限がある中での試合となりました。選手をサポートする観点からも、ホームゲームであるにも関わらず、専任コーチや関係スタッフが会場に入れないことは難しい状況での試合だったように思いました。ただ、選手はここで最高のパフォーマンスを発揮することしか考えていなかったようで、文句も言わず、よく頑張っていました。それぞれの選手は入賞や決勝進出を逃したので悔しいとは思いますが、これまでサポー

トしてきた選手の真剣勝負を間近で見ることができたことは幸せでした。ただ一つ欲を言わせてもらえば、満員の観客がいるスタジアムでやらせてあげたかった。本当にそう思いました。

バブル方式も戸惑うことが多くありました。バブル方式とは、開催地を大きな泡で包むように囲い、選手やコーチ・関係者を隔離して外部の人達との接触を遮断する方法のことです。このバブルには選手村やそれぞれの試合会場、そして日本選手はナショナルトレーニングセンター（以下、NTC）も含まれていました。

私もオリンピック期間はこのバブルで過ごしました。主にはNTCと選手村でしたが、選手村へは2日間だけ滞在しました。短い滞在期間でしたが村内の雰囲気は味わえました。食事はこれまでの選手村の中で一番と思えるほど美味しく、テレビはなかったもののネットが繋がるので部屋での生活も快適でした。ベッドは段ボールで作った簡易型のものでしたが、思った以上に頑丈で、いつもよりも快適に眠れました。

一方、大変だったのは毎日行われるPCR検査でした。事前にワクチン接種していましたが、感染者の数が多くなってきた時期だけに検査結果を聞くときは毎回ドキドキものでした。

こうした制約のある大会でしたが、選手達のこれまでの苦労を考えるとオリンピックを行ってもらえて本当に良かったと思えました。この状況下での開催は日本でなければできなかつたと改めて思いました。

選手にとって1年間は長く、次のオリンピックまでの4年間は想像できない期間だと思います。もし、今年、東京でオリンピックが開催されなかつたら多くの選手達が途方に暮れてしまったことと思います。大会を開催してくれた関係者への感謝の気持ちで一杯の大会でした。

V. 最後に

これまで運良くいくつかのオリンピックに携わることができました。

これらの大会を通じて思ったことは、オリンピックが多くのスポーツ選手にとって最高峰の舞台であり、この大会が多くの人によって支えられているということです。そして現地に行ってみるとそれぞれの国の風土や文化の違いこそありますが、温かく迎え入れてくれる空気がありました。そして大会会場では真剣勝負が行われ、毎回感動することもできました。

こうした最高の舞台にこれから一人でも多くの大学関係者が出てくれることを期待して筆を置きたいと思います。